

## 学校は人生の全てじゃない!!

孤独なオヤジ（ペンネーム）

傍らに寄り添う母親がいない新天地で娘2人と共に過ごす我が家にとって、大きく荒れ狂う家庭に発展するとは思いませんでした。

長女が中学校へ進学した3ヶ月後、「頭が痛い」「お腹が痛い」という朝の体調不良を訴えた初めての言葉に「頑張りすぎて疲れたんだろう。少し休めば大丈夫」と気楽に構えていました。しかし、日を追うごとに表情が暗くなり、仕事を休んで再三病院へ連れていくも改善されることなく、夏休みが明けた頃には部屋からあまり出なくなりました。

更に夜中には「もう死にたい!」と包丁を持って涙を流し暴れ、小学校へ通う次女は「こんなに荒れる家なんていたくない!」と嘆く始末。昼間仕事をしている私は荒れた場を抑えるのに必死で、日を追うごとに睡眠時間も削られ、遂には仕事に集中できずクリニックへ通うほどに精神的に追い詰められていきました。また、毎朝ベランダで洗濯物を干していても、登校する子どもたちの姿が視界に入るとため息がこぼれ「世間から外れた家庭」として自ずと孤独感を抱くようにもなりました。

そんなある日、中学校の勧めによりスクールカウンセラーと会う機会が設けられました。そこでは突発的に思い出される苦しい出来事を片言ながら言葉に出す度涙が零れ落ち、最後には「もうどうしたらいいのか、分からないんです」と人生で最大の号泣を経験しました。そして、カウンセラーが最後にたった一言発した「お嬢さんもお父さんと同じように苦しんでいます。たくさん話してエネルギーを蓄えましょう」との言葉に救われ、人に頼ることでこんなに楽になるんだとその時初めて気づかされたのです。

それから何度かスクールカウンセラーと話を重ねていくと、他の保護者と経験を話し合う「親の会」への参加を勧められました。そこでは「登校しなくなった時は困ったけど、もう我が子の人生は自身で決めるようにしているから全く気にしていませんよ」と笑いながら経験談を話されている保護者の姿がありました。最初はどのようにしてあんなに明るく話せるのか、全く理解することができませんでしたが、帰宅後テレビで目にした「自ら体を傷つけたり、命を絶つ行為」を取り上げた数分間のドキュメント番組を観て、我が子に対する見方に変化が生まれました。

ふと昔の写真アルバムに手が伸び、娘の出産の時に立ち会った時の喜びや公園で遊んだ等々、カメラのレンズ越しに家族全員が顔を見合わせて同じ時間を過ごしていた事を思い出しました。それ以後、「今はみんな辛い時だ。親として自分に正直になって我が子と向き合おう」と娘たちとの向き合い方について前向きに考えるようになったのです。

「娘たちが今まで生きていてくれて本当に良かった。生きていれば何とかなる」ことを肝に銘じ、娘たちには「今の家庭環境を作ってしまったのは父親の責任、お父さんも自分のことで精一杯だったから娘たちの気持ちも理解できてなかった。もうお父さんは正直に気持ちを話すから不満があれば態度じゃなくて言葉に出してほしい」と伝え、会社にも家庭状況を説明のうえ、自宅に近い職場へ異動となり昇進の話も断りました。

家庭での時間を可能な限り増やすと娘たちの気持ちにも変化が現れ、荒れる頻度も少なくなり笑顔ある会話をしつつ、どうしても話し言葉で表現できない時には手紙で伝えられることもしばしばありました。そして、中学卒業間近まで登校を行き渋っていた長女は「父親に頼らず社会に貢献できる大人になりたい」と定時制高校や県外大学へ進学し、今では家庭を離れて社会人として独立しています。

学校は学力や協調性などを養うためには大切な場所であり、人生の通過点として誰しも通る道ではありますが、登校の有無によって今後の人生が決まるわけではではありません。いずれ我が子は親を頼らずに生きていかなければならない時期が必ずやってきます。その時には自らの考えを行動に移す準備やエネルギーが不可欠です。

そのエネルギーを蓄えるためには、信頼できる親に見守られ、その長い期間を忍耐強く待ってもらう必要があります。そして、そんな親になるために私達は心身ともに健康で安定していることが一番大切なことだと思います。成長を願って共に暮らす日常の中で、登校を行き渋る我が子を目の前にすると悩んでしまうのは当然のことです。そんな時は決して悩みを一人で抱え込まず、ぜひ同じ体験をされた方や同じ境遇に置かれている方と一緒に話し合い、肩の荷を下ろし、視野を広めていただきたいと思います。

